

## 「国際フィールドスクール・イン・礼文島 参加報告」 その1

北海道大学・アルバータ大学(カナダ)主催の国際共同調査

日 時: 平成26年8月18日(月)~20日(水) 場 所: 北海道礼文島 浜中2遺跡

礼文島の遺跡で、考古学・人類学・動物学・環境科学の共同学術調査を体験しました。



礼文島の大自然



加藤博文教授(考古学)による講義

- 礼文島では、夏場の1カ月間、世界各地から考古学・人類学・動物学・環境科学を専攻する研究者や学生が集まり、国際共同調査が行われます。
- 今年は6カ国から総勢90名が参加。北大、東大、慶応大、琉球大、アルバータ大(カナダ)、アバディーン大・オックスフォード大(英国)に交じって、関高生8名が参加しました。
- 海岸近くの深さ3mの堆積層には、過去2千年間続いた人類活動の痕跡が残されています。この堆積層(貝塚:浜中2遺跡)の調査を通じ、長期的な気候変動や人類集団の環境適応を復元しようという壮大なプロジェクトです。



増田隆一教授(動物学、関高出身)の講義



深瀬均講師(人類学)の講義

- 忙しい調査の日程の間を縫って、北大の先生方5名が関高生8名を対象に現地講義。さながら「北大オープンキャンパス・イン・礼文島」でした。講義の内容も、考古学、人類学、DNA分析、動物学と多彩。質疑応答も盛り上がりました。



長沼正樹助教による発掘指導



発掘調査に挑む関高生

- 竹べらや竹串を使つての発掘は神経を使う作業。無数の魚骨や貝殻に交じつて、土器や石器、獣骨が出土します。初めての発掘は、まさに興奮の連続です。
- 関高生は、海獣を捕らえて生活していたオホーツク人(5~10世紀)の残した痕跡を追いました。クジラやオットセイ、ブタ、イヌの骨とともに、様々な生活の道具を、ていねいに掘り出しました。



オホーツク犬の頭骨(7世紀)



小型クジラの頭骨(7世紀)



岡田真弓研究員による出土品説明



海外の研究者と共同作業

- 今回の調査に参加していた各国の研究者や学生とは、もちろん英語で交流です。**自己紹介のほか、関市の刀鍛冶や鵜飼の紹介などをきっかけに、英会話にチャレンジしました。**
- 「**熱心に取り組む関高生とお話しできて、大変楽しく過ごすことができた**」(北大・増田教授)、「**非常に活発で、作業の呑み込みも早く、できることならもう少し発掘をともにしたいほど**」(慶応大院生・高橋さん)。現地で高い評価をいただいた関高生。次回はレポートを紹介します。